

# 生涯、在野にて

## —ロシアの巨人アンドレイ・ボロトフのこと

坂内 徳明<sup>1)</sup>

Andrei T. Bolotov  
—A Citizen Encyclopedist in Russia

Tokuaki BANNAI

### 要旨

18世紀半ばから19世紀前半にかけて故郷の村に住み、ロシアの文人博物学者として完璧に“在野で”活躍したアンドレイ・チモフェヴィチ・ボロトフの名前は、これまでほとんど知られることがなかった。しかし、近年の研究により、彼の幅広い分野にわたる多彩な活動の全体像が明らかになるとともにボロトフの評価は高まっている。本稿の目的は、彼の全生涯から何点かの着目すべき事実を指摘するとともに、彼が生きた時空間の《文化的ランドシャフト》を素描することにある。また、数十年間にわたって継続された故郷の村での生活のごくささやかな一コマを彼の「手記」から引用し、その日常誌に18世紀末～19世紀前半の中小貴族に典型的な生活ぶりを見出そうとした。

**キーワード：**生涯学習、ロシアのエンサイクロペディスト、ウサーヂバ（貴族屋敷）、文化的ランドシャフト、国家勤務からの解放と自由、個人の時空間、日常誌、長寿

### 目次

0. はじめに
1. ボロトフの人となり
2. ボロトフの時代
3. ボロトフのトポス
4. ボロトフの生活世界
5. 最後に

### 0. はじめに<sup>2)</sup>

アンドレイ・チモフェヴィチ・ボロトフとは誰か<sup>3)</sup>。彼は、1738年にモスクワの南に位置するトゥーラ県北端のドヴォリャニノヴォ村に生まれ、若い頃はペテルブルク、ケーニヒスベルク等に住んだこともあったが、23歳で（1762年）故郷に戻った後は1833年に死去するまでのほとんどの時間を郷里の小村で過ごした。

本稿筆者は18-19世紀のロシアが生んだ最高のエンサイクロペディストであり、傑出した文人と考えるが、彼が生きて残した無尽の広がりを持つ営為は、不思議なことに、これまで知られることがきわめて少なかった。

その理由はいくつも考えられる。ただちに思いつくのは、彼の出自と、そして出自から機械的に導き出される彼のイデオロギーをめぐる問題である。或る人物の出自そのものが議論の対象となり、研究の前提になることの多かったソビエト期には、ボロトフが中小規模であれ、まがりなりにも貴族だったことが彼の評価にマイナスに働いたことは十分想像できる。このことに関連して、彼の社会・時代観（例えば、農民・農奴ならびにフランス革命に対する考え方）が「保守的」ないしは「非革命的」であったことは同時代の多くの地主貴族に共有されていたとしても、ソビエト期に主

<sup>1)</sup> 放送大学特任教授 東京多摩学習センター所長

<sup>2)</sup> 本稿は、2017年4月9日に放送大学東京多摩学習センターで開催された第22回 卒業・修了記念講演会で行った講演原稿を大幅に改稿したものである。会を主催された東京多摩同窓会、ならびに、表現が舌足らずで、内容が散らかった当日の話にお付き合いいただいた聴衆の皆様へ深く感謝します。

<sup>3)</sup> 人名のボロトフの読み方・表記の方法についてはボロトフかボロトフのいずれかが考えられ、議論があるが、未解決なので、ここでは音引きしない形で表記することとした。

流だった表層的なイデオロギー理解の枠内では許容されなかったことがポロトフへの関心の低さの理由となったかもしれない<sup>4)</sup>。しかし、本稿筆者はこうした理由をさほど重要で致命的とは思わない。より根本的な理由が別に存在すると考えるが、主なものは以下の通りである。

第一に、彼が生きた時代性に関する問題である。ポロトフが生きた18世紀から19世紀前半にかけての時期のロシアに関してわれわれが持っている情報はさほど多くない（むろん、情報と言う場合の中味が問われるのは当然である）。日本における18世紀ロシア文化史をめぐる研究について、ここでは具体例をあげないが<sup>5)</sup>、本国ロシアにおいても状況はさほど変わらないように見える。しかし、研究の「不十分さ」にはそれを導くに十分な意味と理由がある（はずである）。重要なことは、この不十分さ自体がロシア文化史の在り様を明確に示す興味深い問題の所在を示唆している点にある。

例えば、19世紀に活躍した著名な作家や音楽家として、レフ・トルストイやドストエフスキイ、グリシカやチャイコフスキイらの名前が思い起こされるが、それ以前の18世紀について、彼らに匹敵する個人名や個別作品名をあげることはできるだろうか。むろん、18世紀を専門とする研究者は列挙できるとしても、一般的にあげることはきわめて難しい。しかし、だからと言って、個人名や彼らの個別作品に象徴される「個」に対する意識の「遅れ」や「未熟さ」、さらに「個性」「個人主義」が不成立だったとするのは早計であり、そうした結論はさらに大きな誤りへと導くことになる。われわれになじみ深い西欧・近代流の社会と個人の関係性、個性や個への認識、さらには例えば「個人主義」といった言説の形成と成立とは異なる社会がロシアであったのだから<sup>6)</sup>。すくなくとも、19世紀半ばまでのロシアの文化の在り様からは個人の「顔」「個性」がすぐに見えてこないものであり、この事実こそがロシア社会・文化のあり様（《固有名詞》の不在）だった。ポロトフの「知名度」をめぐる問題はそうした時代性の文脈において理解されなければならない。

第二は、ポロトフの活動場所をめぐる問題である。

彼はその生涯の大半の時間をペテルブルクとモスクワという二大都市ではなく、田舎の農村で、具体的に言えば、自身の生まれ故郷で、一地主として、かつ自身の「興味」に没頭して過ごした（後に見るとおり、彼は自分の故郷に「隠居」したのでも、「蛰居」したのでもなかった）。生活場所の選択とキャリアのおかげで、彼の活動は、特に彼の生前には、ごく一部の例外を除いて、ロシア社会の「中心」では、ほとんど知られないままだった。ロシア史の表舞台を、仮にペテルブルクとモスクワに限定するならば、ポロトフが暮らした時空間は完全にその枠組みの外、あるいは両首都が形作る歴史の表層とは別の場所で機能していた<sup>7)</sup>。その意味で、彼は同時代の大きな政治的・社会的事件から作られる《正史》からはほとんど無縁のまま、生きた<sup>8)</sup>。

これらの二つの理由とも、実はポロトフ個人にとどまらず、近代ロシア史の展開と構造を考える上でもっとも基本的な問題群へつながるものである。個人・個のあり方とその自覚・認識、17世紀から18世紀近代への転換の意味、地理・位置的に見た場合の中央と地方の関係性—そのどれもが18世紀ロシア文化史を考える上でもっとも基本的なカテゴリーとなっているためである。そして、この問題群と照応する形で、第三の理由がある。それは18世紀ロシアの学術研究の学史をめぐる問題である。

ポロトフが興味を持ち、打ち込んだ分野は、現代のディシプリンの観点から見て、きわめて多岐に及んでいた。当時、ポロトフが活動した18世紀半ばから19世紀前半という時期は、西欧のみならずロシアでもいわゆる学問体系がまだまだ十分に顕在化していなかったばかりか、特にロシアでは18世紀初頭によく西欧に追隨する形で知的・科学的世界の構築をようやく開始したばかりでであったから、状況はなおさら複雑だった<sup>9)</sup>。西欧との比較の上でのディシプリンの「領域設定」と「展開」という面でロシアにおける学術研究の基本的方向性が問われなければならない。ポロトフの知的営為が多岐多彩な領域に及び、同種の人物を少なくとも同時代のロシアに見出すことが不可能であるとすれば、その時代のロシアにおける知的生活に関する

<sup>4)</sup> ポロトフ評価の変遷については、拙稿「アンドレイ・ポロトフ研究の現在」『人文・自然研究』第9号（一橋大学 大学教育研究開発センター、2015）で一部述べた。

<sup>5)</sup> 文献名はあげないが、文学ならびに歴史分野に限るならば、金沢美知子、鳥山祐介、土肥恒之、豊川浩一、藤沼貴、今井義夫等の仕事がある。ポロトフへのごく簡単な言及は『世界歴史体系 ロシア史2—18—19世紀—』（山川出版社、1984、p.106）にある。

<sup>6)</sup> ここで筆者が念頭に置いているのは、例えば、西欧近代の社会と時代の展開の中で生まれたキーワードが複雑に錯綜しながら変遷していく過程を丹念に記述したレイモンド・ウィリアムズの仕事である（『完訳 キーワード辞典』椎名美智・武田あき・越智博美・松井優子訳、2002、平凡社、原本刊行は1983）。ソビエト「崩壊」前のペレストロイカ期に始まったロシア社会と文化のキーワードを模索し、記述する試みは現在も継続中である。

<sup>7)</sup> ウサーヂバは都市と農村、中心と地方という二つの軸では理解が困難であるとして、近年では、都市と農村とウサーヂバの三つの軸を考えようとする研究者もいる。また、特にロシアの18世紀後半における「辺境・周縁化」（例えば、セーヴェル）については慎重な考察が必要である。

<sup>8)</sup> ポロトフは若い頃に7年戦争に参加し、1762年のロシア宮廷内クーデターに参画寸前に至ったことがある。

<sup>9)</sup> ただちに注釈をつけるべきは、18世紀初頭に開始したロシアの学問体系化があくまで西欧モデルに基づき、ピョートル大帝の指導下に誕生したロシア科学アカデミーならびに「お雇い外国人」研究者の訪露等々をもたらしたという事実である。それ以前のロシア独自の学問的伝統が存在していたのかどうか、存在していたとすれば、これと西欧伝統との「衝突」の問題を検討しなければならない。

文化誌こそが求められているのである。

以上であげた問題群は、したがって、ロシア近代ならびにロシアなるものの基本的特徴をいかに考えるか、という枠組みの中で考察されるのであり、そのような視点から「ボロトフ現象」は捉えられる。

## 1. ボロトフの人となり

ボロトフの95年にわたる生涯の概略は別稿に記したので<sup>10)</sup>、ここでは繰り返さない。そのかわりとして、略年表を掲げる。

### アンドレイ・チモフェヴィチ・ボロトフ年譜

1738 10/7 (旧暦)

- ・旧トゥーラ県ドヴォリャニノヴォ村 (モスクワ南120km) で貴族出身の両親の一人息子として誕生

1738-50

- ・父の軍務によりバルト海沿岸のロシア諸県各地で暮らす「家庭教育」10歳で軍隊登録 (兵站係 каптенармус)

1750-54

- ・両親の死により孤児となる ベテルブルク、ドヴォリャニノヴォで生活 (伍長сержант、士官 офицер)

1755-62

- ・プロシャへ 7年戦争 (1756-63) グロス・エゲルスドルフの戦い (1757年) に参加 通訳として勤務 ケーニヒスベルクで大学の講義聴講 軍務より勉学に向くと自覚 “大地のりんご” を試食・ロシアへ持ち帰る

1762-74

- ・「貴族自由令」(2/18) により退役 (6月) 故郷へ帰還 (9/3) “田舎暮らし” の始まり 領地の農業経営 農学・植物学・農芸・野菜・果実栽培法・医療等を学ぶ日常

1764 (7月)

- ・アレクサンドラ (1750生まれ) と結婚 約70年連添い、9人の子供に恵まれる

1768-69

- ・自宅を新築

1774-76

- ・エカテリーナ二世領地の管理 ボゴロヂツク (トゥーラ南西65km、モスクワ南南西130km) の都市・宮殿設計 ただしドヴォリャニノヴォと往復『子供の哲学』(75-79)

1778-79

- ・ロシア最初の農業雑誌《村の住民》(78-79 2部週刊) を刊行 住居新築 ロシア初の子供劇場設

置 脚本執筆 (『不幸な孤児』他) 電気機械・電気治療 傑出した評論家H.H.ノヴィコフと交流

1780-89

- ・雑誌《経済マガジン》(全40巻 息子パーヴェル編集) に多数論文発表 『キリスト者の感覚』(81) 『人間の真の幸福への手引書』(84)

1784-85

- ・ボゴロヂツク宮殿の風景庭園設営 庭園・パークのスケッチアルバム

1789

- ・回想録『人生と出来事』執筆開始 (未完・未刊 1870-73に一部刊行)

1785-87

- ・庭園・パーク芸術関連論文の執筆

1790-

- ・果実学 『各種リングとナシ約600種の描写と記述』(全7巻、1797-1800、未刊)

1796

- ・エカテリーナ二世の死 ドヴォリャニノヴォ村に戻る (退職時8等官 58歳)

1803

- ・ベテルブルクに11ヵ月滞在 『エレキテルならびにそれによる各種病気の治療について』

1822-30

- ・《農業雑誌》に多くの論文を発表 上記回想録の執筆続く

1833 10/3

- ・自宅で死去、享年94歳、隣村ルシャチノの墓地に埋葬 (10/7)

年表を補う形で、彼の生涯を考える上で注目すべき点をいくつかあげる。

- (1) 彼の父親は貴族の身分であったが、所有する村の戸数11、農奴数95人であったことからボロトフ家は貴族としては中規模と考えられる<sup>11)</sup>。
- (2) 彼の学業・教育は、当時のロシアの教育制度 (特に地方の) が未発達だったことから、完全に独学である。むろん、手助けをした人々がいたとはいえ、例えば、より後世の貴族の多くの家庭に見える住み込み家庭教師ではなく、周囲にいた人びと (父親関連の軍人、読み書きができる老人、聖書に詳しい人物等) の手になるものだった。
- (3) 父親の後押しもあって、当時の貴族にはほぼ義務化されていた軍隊勤務 (指揮官) を早くから開始したが、ボロトフは読書・学習により大きな興味を示した。
- (4) 結果として、1762年に公布された「自由令」を最大のチャンス到来として故郷に戻って田舎暮らし

<sup>10)</sup> 拙稿「ロシア貴族屋敷 (ウサーヂバ) のエンサイクロペディスト アンドレイ・T・ボロトフのこと」『言語文化』第50巻 (一橋大学語学研究室、2013)。

<sup>11)</sup> 1727年時点 (1719年のロシア国境領域) の農奴数による規模を20人以下、21~100人、101人以上で区分すると、それぞれ60% (38千人)、32% (20千人)、8% (5千人)、1777年では、59、25、16% (Миронов Б.Н. Социальная история России. Т.1, СПб., 1999. Стр.90)。

をすることを、いささかも躊躇することなく決断・選択した。

- (5) 郷里では、農耕と農地経営はむろんのこと、都市・宮殿・庭園の設計・設営、庭園管理に没頭し、その生活は死ぬまで一貫していた。
- (6) 大地主ではなかったからこそ、自ら農業経営、農地管理、農作物植栽、果樹園栽培に腐心し、工夫と努力を欠かさなかった。その際、当時の西欧で刊行された関連文献（主にドイツ語）で学習して得た知識を自身の庭園・菜園・農地に応用し、同時に、その過程をていねいに記録した。
- (7) 彼の興味は森羅万象に及んでいたため、学業も自然科学をはじめ文学、歴史、哲学、思想、教育等々きわめて多岐の分野（博物学）に渡った。ただし、その学習の中心は、当時のロシア語書籍文化が十分発達していなかったことから、外国語図書・文献の読解に置かれた。それらは軍務の傍ら、プロシャやバルト地域で購入され、また、故郷に戻ってからはモスクワに注文して入手された<sup>12)</sup>。
- (8) デスクワークだけでなく、農耕・園芸の実労働を合わせたものが彼の学びの生活だとすれば、そうした生活の全体をもっとも鮮明に物語る資料が、30年以上をかけて書き続けた「手記」（生前は未刊行、最終稿の表紙に記された正式タイトルは『ポロトフの手記、あるいは子孫のために自ら書いたアンドレイ・ポロトフの生涯と出来事』**図1、2**）である。この膨大なテキストは生前には刊行・発表されず、いまだ全体が不明確な部分も残るが、この手記は18世紀半ばから19世紀初頭までのロシア社会を活写した優れた年代記として大きな価値がある<sup>13)</sup>。

ポロトフが関心を抱き、活動した領域は以下の通り一農学・農業技術、生物学・植物形態学、栽培・園芸・庭園学、都市計画、天文学、医療、哲学、倫理学、教育学、歴史学、文学、児童文学、文芸批評、音楽、美術、児童演劇、翻訳・雑誌発行等。これら分野の多くは、上記したとおり、当時のロシアでは、ディシプリンとして成立していなかった。ポロトフは、同時代の西欧における「百科全書」的な運動や博物学の発展を横眼で見ながらも、急速に芽生えつつあった同時代ロシアにおける知的・精神的領域を巡っていた。

ポロトフの生涯を象徴する言葉は何か。これに関しては、ロシア（ソビエト）の研究者による基本的論考を参照しながらも、アトランダムにあげるとすれば、次の言葉ではないだろうか—田舎暮らし（晴耕雨読？）、書斎派かつ実践派、百科全書派、プラグマチスト、時代の常識に囚われることなく、つねに自ら実験を試み、何でも手作り・創意工夫した人物、そし

て、常に学ぶ姿勢、長寿等々。文字通り、生涯学習を実現した、いわば放送大学生の鏡とも呼ぶべき人物である。

## 2. ポロトフの時代

ポロトフが生きた時代について素描しておく。

ピョートル一世の即位に始まるロシア近代化は、それまでのモスクワ・ルーシの時空間を物理的にも、精神的にも全面的に再編成する、あるいは、完全に新たなものとして誕生させていく過程であった。それまで、西欧世界とは日常レベルでの交渉がほとんどなく（例外は、外交使節の来訪、通商ならびに巡礼等）、他文化の経験をしてこなかったルーシは、少々誤解を招く言い方をすれば、「文化」を持たなかった。ピョートルによる西欧化によって、ロシアは初めて西欧を他者として意識し、そのことで、自己認識が誕生したからである。

こうして、自らのロシア文化史への道の幕が切って落とされたが、この時期の文化史を考える上での基本的問題群の中から、ここではポロトフとの関連で、新興貴族を中心とする貴族文化の成長・発展に関連する問題、そして読み書き文化をめぐる問題の二点について述べる。

ルーシがロシアとして成立する上でクリアすべき最大の問題は近代国家の根幹たる官僚機構と軍隊制度の整備であった。ピョートルはそれを専横的に成し遂げたが、そのためには国家に全面的に奉仕・勤務する人材の確保と養育が必要だった。それまでのモスクワ宮廷を牛耳っていた大貴族（ボヤールン）の権限を抑えるべく、彼らとは別の、身分や出自にとわられない能力ある人材をピョートルは優先的に登用した。新興貴族（ドヴォリヤニンと呼ばれ、ルーシ期には宮廷内に勤務する士族だった）の誕生である。ピョートルが死去した1725年からエカテリーナ二世が即位する1762年までは、皇帝を核とする国家権力、旧体制の大貴族、そして新体制下の中小貴族の三者が三つ巴の形で展開する権力闘争の時期にあたり、新興貴族が階層として一定の「自由」を確保する1785年までを一つの区切りとされることが多い。そして、近年のロシア文化史研究では、この1785年を契機として、18世紀後半・末、さらに19世紀初頭・半ばまでの時期をロシア貴族文化の最盛期と考えるのが一般的である。

階層としての貴族に関する二種類の数値をあげるならば<sup>14)</sup>、帝国内の人口比は、

1762年	全ロシア人口 2181万人
	貴族21万人 (0.9%) 農民1997万人 (92%)
1795年	全ロシア人口 3560万人
	貴族72万人 (2%) 農民3160万人 (88%)

<sup>12)</sup> 彼と家族の読書生活については、拙稿「18世紀後半ロシア貴族の家庭における読書—パーヴェル・ポロトフの卓上層（日誌）にみる—」『言語文化』第53巻（一橋大学語学研究室、2017）。

<sup>13)</sup> 「手記」の研究史については、注4にあげた拙稿を参照のこと。

<sup>14)</sup> 注11の文献、129-130ページ。

1858年 全ロシア人口 5920万人  
 貴族89万人 (1.5%) 農民4895万人 (82%)  
 所有農奴の数の大中小 (1~20人、21~100人、101人以上) からみた規模による割合は、  
 1777年 小貴族 59% 中貴族 25% 大貴族 16%  
 1836年 小貴族 54% 中貴族 28% 大貴族 18%  
 1858年 小貴族 39% 中貴族 38% 大貴族 23%

ピョートル期は、急激な近代国家建設を目的として、可能な限り国家のために奉仕・献身することを求めたが、ピョートル後、貴族たちの権利回復と獲得の時代となる。1730年に貴族間の闘争の「妥協点」として即位したアンナ帝の時代はそうした時代の雰囲気をも明確に反映している。

1736年12月に出されたマニフェストの内容は、勤務年限を無制限から25年に削減することを主旨としていたが、同時に、家庭内で息子あるいは兄弟の一人を領地経営のために解放する、ただし、民間の仕事で必要な場合にはそれに役立つ学習を義務付けるものだった。また、退職して自身の領地に残る貴族には自分が所有する農奴の数に対応する一定数の徴募兵の設定が求められた。貴族の学習義務については、翌1737年にさらに強化され、7歳、12歳、16歳、20歳の4回、しかも後者3回については試験（科目として、読み書き、歴史、算術、地理、測量、築城学、神の法）が行われることになった。1740年から始まるエリザヴェータ帝の時代にも貴族の勤務義務は和らげられたが、それを決定的にしたのが1762年2月18日に発布された「貴族自由令」である。当時、増大していた貴族権力を抑制すべく、国家への勤務義務から解放することがその狙いであり、貴族個人は自分の判断で、仕事にそのまま残るか、退職するかを選択することが可能となる（海外へ出ることも可能だが、戦時は例外）。ボロトフは、まさしくこの「自由令」公布と同時に、まっ先に軍人を退職し、自身の郷里での農地経営へと邁進したのであり、その選択にいささかの迷いはなかった。ピョートル期に誕生した新興貴族が目ざした「自由」が国家勤務からの「解放」を意味したとすれば、それは個人ならびに家族の人生設計を可能にするものだった。国家奉仕から個人・家族の人生設計へと向かった貴族の多くは自分自身の生活観を求め、自身の好みや「趣味」、生活感覚に忠実に生きることを希求したのであり、そのことは個人の生活美学の覚醒を意味した。ボロトフはこうした転換期を象徴する人物である。

ピョートル期がある種の文化革命を誕生させたと言えるならば<sup>15)</sup>、そのもっとも基本的な根幹の一つは文字文化の誕生である。ピョートル自身が発案し、かつ

作成・校正した「世俗文字（市民文字とも）」は西欧文物の輸入にとって不可欠なツールとなったばかりか、新たなコミュニケーション・社交の形態とそれによる新たな社会創世をめざした「文化資源」であった。むろん、モスクワ・ルーシの時代ならびにそれ以前にも、確かに文字は存在していた。しかし、それは聖典ならびに宗教的文書、ごく一部の行政・外交・土地管理等に関連した文書（他に、白樺文書）を残すための文字に限られ、その文字を読み書きできるのは、聖職者（教会スラブ語）とごく一部の官僚・書記（古ロシア語）に限られていた。それ以外の人々は歌や昔話・伝説・物語で伝え合い、日常生活のさまざまな思いの伝達は口頭表現で十分可能であり、そうした時代が長く続いた。

口承文化を基礎とする時代と社会は17世紀半ば以降、次第に変化し、一般人（と言っても都市住民を中心とする）の間に文字によって主張や思いを表現したいとする「機運」が生まれ、最終的にはピョートル期の「文字創成」がそれまでの文字社会のあり方を一大転換させることになる。18世紀初頭以降、数としては少ないものの、外国語で書かれた文献を読み、それを追隨する形で世俗的な内容を自ら表現しようとした人々が生まれた。ロシア近代の読み書き文化の発生であり、リテラシーが文化の尺度となる時代の始まりである。そして18世紀後半は、こうした流れが急激に発展していく時期にあたっている。それは、まず、ロシア語の詩法策定と同時に実際の詩作、そして、外国語（フランス語、ドイツ語）の学習と使用にはじまり、外国語による書簡や日記の実作へと続いていくのである。

ボロトフが身に付けた読み書き文化はそうした時代の産物だった。それは、あたかも18世紀以前の《無文字社会》への反撥と「取り返し」であり、「暴走」するかのようになり、急激かつ猛烈に進行する。いきなり急進化し、過剰なまでに「雄弁さ」を目ざした。日常・日々の生活で脳裏をかすめたコトもモノもすべて、思いの丈をすべて、丸ごと記録することに邁進した。後述するボロトフの孫が記した証言によれば、祖父は朝に晩に欠かすことなく書きものをしていたという。その「産物」は、一つが毎日の気象記録であり、これは通算52年間、前日と今朝の天気、温度と気圧、日の出時の風と空の状態が記され、アンドレイの死後、ロシア学術院へ献呈された。また、一つは「出来事日誌」であり、これは、前日に自分が何をしたか、どのような考えや思いが浮かんだか、客があればその際にどんな興味ある会話や話があったのか、について記されていた。そして、ロシア文学史・精神史の中で燦然たる輝きを残す「手記」である。こうした《記述衝動》<sup>16)</sup> としか名付けようがない一つの動きこそが、18世紀末

<sup>15)</sup> 文化革命としてのピョートル期については、膨大なロシア語文献を別にして、James Cracraftによる一連の研究結果、特にThe Petrine Revolution in Russian Culture. Cambridge, Massachusetts, and London. 2004. が大いに参考になる。

<sup>16)</sup> このタームは筆者によるもの。ロシア（ソビエト）国外で、1960-70年代にRice J.L.とともにボロトフ再評価のきっかけを作ったMark Raeffはボロトフが「graphomaniaを患っていた」とする。さしずめ、「書き中毒症」か。ボロトフが書き残した全体が「通常のフォーマットで350巻にのぼる」との記述（Венгеров С.А.）があるが、その根拠は示されていない。

から19世紀初頭にかけてのロシア近代の文字文化(「詩から散文へ」、近代標準語・文章語の生成)をめぐる具体的状況の基礎を形作っていたと考えられる。

### 3. ボロトフのトポス

ボロトフの住居はモスクワ県の南に位置するトゥーラ県(現在のトゥーラ州)の最北部にある<sup>17)</sup>。ボロトフが生まれたドヴォリャニノヴォ村はモスクワから直線で南に120キロの所にあるから、モスクワ近郊と言っても間違いではない。村の名称について、名付けの経緯等は具体的には不明だが、新興貴族(ドヴォリャニン)の象徴的意味があることは改めて述べるまでもない。

ボロトフが生涯を過ごした屋敷は、以下の図面(図3-8)に全体ならびに各部屋を示したとおりである。これは、それほど大きな屋敷でも御殿でもないが、18世紀以降、あるいはより広義では16世紀半ば以降の建築・文化史のタームとしては「貴族屋敷・館」を意味するウサーヂバусадьбаと呼ばれている。それは、結論から言えば、ボロトフのみならず、近世・近代ロシアに生まれた貴族(一部、皇帝家族、商人を含む)の居住空間の文化総体を意味する。ここで文化総体としたことには大きな意味がある。というのは、ウサーヂバは領主の住まい・建築物だけでなく、屋外ならびに館の外に広がる庭園や池、並木道、果樹園や農園、各種経済活動の施設(倉庫、物置、作業小屋等)をも含む空間を意味するからである。

このウサーヂバはヨーロッパ・ロシアを中心に遍在していた(概数で言えば、18世紀前半3万、19世紀半ば5万、20世紀初頭4万を数えた)。しかも、貴族階層の人々のみならず、周囲の各種住民をも含む、一つの独立した時空間を形成し、ある種の《孤島》と見做されていたから「貴族の巣」と呼ばれることが多く、地主貴族の社交・もてなしhospitalityの場である。中央や都市の社会からはまったく隔絶された、きわめてプライベートな世界となっていた。そして、18世紀半ばから誕生するインテリゲンツィヤが主導していくことになる思想と文学、芸術と学術等の知的活動の一大拠点として機能した。その意味からすれば、ロシア精神史の重要な《始原》の役目を持つウサーヂバは、別の面からすれば、ロシア社会の文化的背景background、あるいは、《文化的ランドシャフト》<sup>18)</sup>と呼ばれることがある。したがって17世紀から19世紀、20

世紀初頭までのロシア文化の基本要素をすべて凝縮・集約した形で具現していた。それは、1917年の革命により土地の国有化とともに、制度的には一気に崩壊した(もっとも、それはあくまでも「制度的」であり、実体的には、19世紀半ば以降の貴族文化の衰退と農奴解放令以降のウサーヂバ細分化・大衆化という流れによる)とはいえ、ロシア人の自然観、空間・場意識、対人観の「連続性」、そしてそれらの記憶化(文学作品、映像等による)を通じて現代までも継承されてきた。その意味からすれば、ウサーヂバは革命前のロシア文化全体の基層を形作ったと言って過言ではない。

トゥーラ県のウサーヂバは、1858年の第10回人口調査によれば、登録数が2000余を数えたが、その多くが20世紀の激しい社会変動の中で焼失・破壊されたと考えられる。2007年から2010年にかけて《ウサーヂバ研究協会》が行った調査によれば、トゥーラ州全体で確認されたウサーヂバは大小合わせて305である。その内訳は、母屋が残るもの58、住居翼はあるが家屋なし8、教会だけが残存しているもの137、パークのみ残るのが58を数えたという<sup>19)</sup>。

モスクワとトゥーラを結ぶ道はトゥーラ街道と呼ばれ、この街道をまっすぐ南下すれば、レフ・トルストイのウサーヂバであるヤースナヤ・ポリャーナである。ボロトフのウサーヂバのあるドヴォリャニノヴォ村はこの街道からは7露里入った場所にあり、このウサーヂバでボロトフは生まれ、生涯の大半を過ごした。

### 4. ボロトフの生活世界

先に述べたとおり、ボロトフは1762年の「貴族自由令」が出るやいなや、ただちに帰郷して、自分が育った村の屋敷での生活を開始した。それは、幼くして両親とは死別したのもかわからず、子供時代を過ごした旧宅であり、20歳前半のごく若いながらも貴族屋敷の主人として、地主として、そこで生涯を送った。彼は帰郷後、ただちにごく一部のリフォームを、さらに、数年後には所帯を持ったことによる建替えを試みた。ここに掲げた図面はそれぞれの時期のものである<sup>20)</sup>。

ボロトフの家は、彼が記憶に従って「手記」に文章で記述し、それと同時に、イラストレーションとして添えたスケッチならびに図面に再現したとおりである。それは、旧宅、1763年のリフォームした屋敷、さらに1767-1768年に建設された新邸宅の3つである<sup>21)</sup>。

まず、旧宅(図4、5)は一階建て、木造の長方

<sup>17)</sup> 現代のトゥーラ州の面積は26000平方キロ(南北190×東西200キロ)、人口152万人、人口密度は16.88人。

<sup>18)</sup> Культурный ландшафт как объект наследия. М.-СПб., 2004. この論文集の編者はモスクワの《ウサーヂバ研究協会》の前代表者ユーリイ・ヴェデーニンである。

<sup>19)</sup> Чижков А.Б. Тульские усадьбы. Тула, 2001.

<sup>20)</sup> 図は「手記」の記述と挿絵に従ったが、記述自体に不明な点も多く、部屋の配置に関して後世の研究者の解釈が分かれることもある。例えば、新居の部屋の配置についても意見が分かれるが、ここでは、Бердышев А.П.(ボロトフ研究の第一人者、特に農業史の面からボロトフの位置づけを行った人物で、現在のボロトフ邸=ミュージアムの復元とボロトフ再評価に大きな影響力を残した)が作成した図を採用せず、Байбурова Р.М. Русский усадебный интерьер эпохи классицизма. Планировочные композиции. В кн.: Памятники русской архитектуры и монументального искусства. М., 1980によった。本稿の図版作成については、東京多摩学習センター職員の福田真梨子さんの全面的な協力を得た。ここに謝意を示したい。

形、小妻と切妻の屋根、横側面に「煙出のない部屋」とあるのはこの家の台所部分だが、同時に、調理をはじめとして家事をする多くの召使の部屋にもなっていた。全体にきわめて暗く、室内にインテリアも草食もなかった、と「手記」に記されている。帰郷後、すぐにリフォームをしたかったが、金銭面で断念した。それにとりかかるのは1763年春であるが、それは部分的なものに終わる（図6）。新宅の建設を決意するのは1766年であり、実際には1768～1769年にかけての工事により新居が完成した（図7、8）。

新居は川から40メートルの高さの丘の上、母屋の正面（図11）から周囲を見下ろすことができる高台に建てていたため、景観・見晴らしに最大の効果があった。現在は、母屋から木々の間を川へ降りていく階段がある（図11では、中央に聳える塔状・階上の施設が描かれているが、1988年に復元されたポロトフ邸宅ミュージアムにはその見晴らし部分はない）。建物は21×13メートル（273平方メートル、約83坪）の広さで、部屋数10余、窓数22、比較的小じんまりした主人の書斎、部屋間の通路が多いことが特徴である。使用人を含めた住人の移動のしやすさ、採光、客人の迎え入れ・もてなしに工夫が凝らされ、ポロトフの求めた住み心地優先の感覚<sup>21)</sup>が実現されていると考えてよい。

母屋を取り囲むウサーヂバの敷地全体を示す図3には、景観と見晴らしを重視しながら、中小貴族の屋敷の規模に対応した庭園や花壇、果樹園や農園、各種作業施設を設営した意匠が読み取れる。大貴族のウサーヂバとその庭園とは違った空間世界がここにはあった。それは、それ以前、ロシア中世の閉じられたコスモスとしての修道院や城砦内の庭園や、自己完結の世界・ある種ユートピア（モスクワのイズマイロヴォ、コロメンスコエ）でもなく、また、18世紀初頭以降、都市に、特にベテルブルクに作られた整形庭園のモデルとしての「夏の庭園」でもない、ロシア的景観の新たな手法による組織化である。庭園史研究では、時期的には、フランス式整形庭園からイギリス式風景庭園への移行期とされることが多いが、そのことの検証作業はここでは省く<sup>23)</sup>。

ポロトフが郷里で暮らした時間の細部について知ることのできる部分は多くはない。早朝に起床し、お茶を飲み、庭園を散策し、庭園や農場を見回る、そして食事と読書を繰り返す日々は、帰郷後、基本的なパターンは変わることなく、数十年も継続した。そしてその繰返しにこそ、ポロトフという人物のすべてが込められていると筆者は考えるが、次の瞬間に、果たして

繰返しなのか、との疑念がよぎる。毎日のディテール一つ一つに意味があることからすれば、それを微積分することでパターンと呼び捨てることには大きな問題が残ることを認めねばならない。

ごく当り前の日常の生活サイクルを知る一つのテキストを以下で紹介したい。彼の回想録である『人生と出来事』の一節で、記述冒頭の「当時」とは1763年春のことだが、それが思い起こされて文章化されたのはほぼ40年後の1802年である。

…当時の私の生活ぶりは全体として風変わりであり、そしてとても単調かつ平凡だったから①、さほど多くの言葉を費やさずとも記することができる②。

毎朝、日の出とほぼ同時に起きる私が行う最初のことは、庭と花壇に面した窓③を開け放ち、花壇近くに座り、すべての善の創造者への思いにふけり、私への創造者のすべての慈悲にたいして深い感謝の感情を捧げることである。この最初でもっとも快い仕業をしている間に、私の使用人アブラムがお茶を準備している。

それは当時、私の特別な時間だった④。かつて胸を病んだ時の治療として、水に浸したbukovitsaの葉に蜂蜜とクリームを加えた飲み物を数日間飲み続けたことがあり、それがすっかり私の習慣となっていた。それがとても心地よかったことから、お茶のことをすっかり忘れるほどで、最上のお茶である中国茶のような満足感をもってそれを毎朝飲んでいたので。かくて、起きると数分後には私のアブラムが、煮出したbukovitsa入りのティーポット、暖めた蜂蜜の小ポット、小ポット入りの温めたクリームを載せた盆を運んでくる。彼の後から小僧のババイが火をつけたパイプとタバコを持ってくる。そして私はお茶を飲む、満足いくまで飲むと、軽く質素な、ゆったりとした農村服を着て、ポケットには何か小さな本をしのばせて庭に急ぐ⑤。

庭では並木道と小径を散策し⑥、自然のすべての心地よいものに見とれ、そしてポケットから本を取り出す。そしてどこか人気のない場所に隠れるようにして大切な朝の思索の読書をし、天空に向けて精神を高揚させ、世界の所有者と天上のわが父ならびに主の前で膝まづき、自らの感情と祈りを捧げる。しばしそうした時間を過ごしてから私は散歩を続け、庭師を探して彼に⑦、その日その時、何をすべきかを命ずる。このようにして庭

<sup>21)</sup> 現在、屋敷があった場所に建てられている住居＝ミュージアムは、20世紀初頭に男子修道院となり、その後1931年に火事で焼失、1988年に再建されたものである。復元がどの程度まで「厳密」なものかについては不明な部分もある。

<sup>22)</sup> 「住み心地」に着目する色川大吉と『アナール』派社会史については、注28を参照のこと。

<sup>23)</sup> 筆者個人としては、ポロトフは風景庭園への移行も十分意識しながら、ドイツのA.D.テアに代表される農業と美学に関する考え方にも大きな影響を受けていたと考える。ドヴォリャニノヴォだけでなく、ボゴロチツクの庭園設計・造営も含めて、ポロトフによる《ロシア風庭園・景観》創造の意味を解明すべきであり、この時期のロシア庭園の社会的意味を教養、社交、芸術・学問生活の場といった多くの視点から総合的に考察する必要がある。

全体、時には自分の屋敷領地全体を歩き回り、満足して自室に戻る。そこにはいつも私に朝食が準備されていた。

それは、小鍋で炊いたごくありふれたソバ粥である⑧。フィン製の上等なバターを加えたものはとりわけ美味で、私は喜んで口にするのだった。それから馬に跨り、穀物の耕作状態を見に畑に出かけるか、あるいは庭園か、その日に作業が行われる場所に行って立ち会うのである。

12時には部屋に戻る⑨。そこでは、軽く、豪華ではないが十分な量のある、美味しい農村風の正餐が準備されていた。たっぷり食事をして、再び庭園に出るが、そこで私は、使用人たちが食事と休憩を取っている間、どこか気持ちよい陰に座って読書をするか、絵筆と絵具を手し、作業が再開して声がかかるまで何かを描く⑩。同じく快い夕刻に私は再び、自然の美を楽しむ。自然美をより心地よく享受し愛するため、通常は古くからの下庭園へ行くが⑪、そこからは周囲全体とわれらスクニーガ川の蛇行した美しい流れが見える⑫。そのために私は、草のない丘の頂に特別の素晴らしい場所を見つけていた⑬。

そこでは、柔らかい草の上に腰を下ろし、茂み全体に鳴り響くナイチンゲールの大声の歌を聞きながら、太陽が沈んでいくのを愛で、畑から家へ、また川を越えていく家畜を、そして、愛する美しきわれらがスクニーガ川の小石を渡る水の音をこよなく愛する。そして、しばしば快い歓喜にまで達しながら、その場に夕刻の遅くまで座り続け、夜食の準備がすでにできたと伝えるべく召使がやってくることもよくあった。

このように当時の私は、自分の孤独の独身生活を送っていた<sup>24)</sup>。

上記引用文で気付いた点にコメントを付けてみる。

- ①自身の生活全体を「風変わり」で、「とても単調かつ平凡」と認識していたことは興味深い。
- ②このように書きながら、以下で細部まで記述したことモチベーションはどこにあるのだろうか。
- ③窓の下・近くに花壇を設えるのは18世紀半ば以降に新しく生まれた建築様式である(図12)。
- ④喫茶が「特別な時間」を提供するものとして儀礼化されていたことに注目したい。
- ⑤レフ・トルストイの同様の姿を思わせる。
- ⑥「並木道と小径」はウサーヂバのシンボルとも呼ぶべき存在である。その散策、朝の思索と主への祈りはウサーヂバの生活の基軸である。
- ⑦孫の回想によれば、庭園や農園の手入れをする20名、時にそれ以上の「勇士部隊」が「毎日、シャベルとスコップを手にして家の入口に集合してい

た」。ポロトフのような大規模ではないウサーヂバにも専用の庭師がいたのは、一般的なのか、それともポロトフの場合のみだろうか。

- ⑧朝食はソバ粥のみだが、昼食は文字通りディナーであり、ここではその内容は記されていないが、以下にあげる孫の回想には皿数までが記されている。
- ⑨12時ちょうどに昼食というのは少々早くないか？これはポロトフの几帳面な性格によるものかもしれない。
- ⑩散策、読書と画業は彼の生涯そのものだった(図9、10)。息子との共作も含めて残された作品は多く、特に有名なのはボゴロヂツクの宮殿と庭園・パークを描いた連作(24枚からなる画帖)であり、これは1787年6月にトゥーラに行幸したエカテリーナ大帝に贈呈された。
- ⑪庭園は、自然の傾斜を利用した形で上下二つあった。図3を参照のこと。
- ⑫スクニーガ川は今なおポロトフの領地を貫いて流れる川である。
- ⑬いわばベルベデーレの場所か。ウサーヂバの母屋も川と村を見下ろす高台にあった。

この「手記」の記述を補完するテキストをあげる。筆者は、アンドレイ・ポロトフの息子パーヴェルの息子、アンドレイの孫ミハイルである。パーヴェルはオリョール県にあるポロトフ家の領地で暮らしていたが、毎年夏の2、3カ月、ミハイルを連れて父親のもとを訪問・滞在していた。したがって、ボゴロヂツクでのボプリンスキイ宮殿設営が終了して、ドヴォリャニノヴォに完全に居を移してからこの時期の祖父の生活ぶりをもっとも身近で観察することができた。その意味で彼の記録は貴重である。

…(祖父は一引用者) いつも、とても早起きで、夏は3時過ぎ、冬も5時だった。朝の祈りの後、彼は毎日の朝の勤めの言葉を読んでから文机に座って書きものを始める(中略)。

祖父はそれ(前述した各種の記録一引用者)を、家人が皆起き出し、祖母がお茶を運んでいくまでにはすべて書き終えていた。お茶は好物で、最初は熱く、次には何かパン類の一片とともに、3、4杯目には冷めたものという風に何杯も飲んだ。そしてフキタンポポ入りのトルコ煙草を燻らせながら、お気に入りの「ハンブルグ新聞」を読んで、興味深い記事があるとそれをノートに書き付けた。それから自分の書きものに取り掛かり、正餐まで続けた。

12時過ぎには必ず食卓につく①。食事は4皿か、時に5皿(冷製、温製、ソース、温かなメイ

<sup>24)</sup> Болотов А.Т. Жизнь и приключения Андрея Болотова, описанные самим им для своих потомков. Т.1-4, СПб., 1870-73. Т.2. Стр.410-412.

ン料理、ケーキ)が出されたが②、彼は、クワス(ロシアの発酵飲料—引用者)以外は飲まない。その後、きっかり一時間休息し、目を覚ますと何か甘いもの、特にフルーツを好んだ。5時には奥の部屋でお茶を飲み、新聞を読んでもらう③。9時の夕食後、すぐに就寝した。彼は秋冬にはこれを必ず日課にしていたが、春夏は庭の作業をしたので④、書きものは天気の良い日にしていた<sup>25)</sup>。

同じくコメントとして、

- ①やはり12時であることに注目したい。
- ②食事はフルコースである。
- ③何かの文章を声あげて読む・朗読する(お茶を飲みながら)のはボロトフ家の習慣であった。息子パーヴェルは読み聞かせだけでなく、父親の指示で新聞切り抜きもしていた。
- ④1763年の庭と19世紀初頭の庭は違うことを想起すべきである。この間に、庭園様式の変化として、ボロトフらによるイギリス式風景庭園の導入とロシア庭園への試作が行われていることに留意したい<sup>26)</sup>。

こうした中小貴族のウサーヂバにおける生活ぶりを、文学作品ではあるが、「忠実に」描いた場面は、例えば、アレクサンドル・プーシキン作『エヴゲーニイ・オネーギン』のタチヤーナのラーリン家の昔からの習慣を謳った箇所(第2章第35節)に相通じるものである。ユーリイ・ロトマンの詳細な時代考証と注釈によるまでもなく、それは18世紀後半から末にかけての地方の中小貴族の文化の記憶を再現させたものと言える。

かれらは平和のうちに  
昔なつかしい風習を守り続けた。  
四句節の前の肉食日には  
お国ぶりのパンケーキがつきものだった。  
かれらは年に二回づつ精進をした。

まるいブランコ、皿占いの歌。  
輪踊りが好きだった。  
人々は欠伸しながらお祈りを聞く  
三位一体の祭日は  
お供えのうどの小束に  
有難なみだを二粒三粒こぼすのだった。  
かれらにクワスは空気のように欠かせなかった。  
食卓につくお客には  
官位の順に皿を運んだ。(小澤政雄訳)<sup>27)</sup>

## 5. 最後に

以上、ボロトフという人物の膨大な生き様のごく一部を紹介した。その意味から、本稿は全体として《ボロトフ案内》であり、ボロトフという一人の人物を通して見えてくるロシア文化史への《誘い》である。

アンドレイ・チモフェヴィチ・ボロトフは完璧な生活人であり、そのことにプライドを持ち続けて生涯を過ごした一個人だった。彼が生きた時代は、外形的には、ピョートル大帝が幕を揚げた近代ロシアを継承・発展させたエカテリーナ大帝が巨大なロシア帝国をほぼ完成させた時期に該当する。そのマクロコスモスの中、この上なく狭隘な場である郷里の村でほぼ一生を送ったボロトフの生と日常はミクロコスモスそのものだった。限りなく大きくて広いロシアの時空間を一望するとき、消えてしまうばかりに微細な彼の村も、ボロトフ個人の生活も、歴史の忘却に任せる他にないと見える。しかし、ボロトフが築き上げた屋敷・庭園をはじめとするウサーヂバが織りなした時空間を再構築するとき、そこでの日常性<sup>28)</sup>の「捉え・学び直し」が限りなく多くのものを現代のわれわれに残してくれると感じるのは筆者だけではないだろう。

ボロトフとウサーヂバの日常は、個人の日常の基層に深く降りて行くことによって、その時代と土地・社会の無尽蔵なまでの細部を、言いかえれば同時代かつ歴史的な《文化的ランドシャフト》を窺い知ることができる最高のテキストとなる。

(2018年10月29日受理)

<sup>25)</sup> Болотов М.П. Андрей Тимофеевич Болотов. Русская старина, 1873, т.8, СПб. Стр.741-742.

<sup>26)</sup> この点に関して、今なお価値を失うことのない仕事は、1952年に博士候補論文として合格したЩукина Е.П. Подмосковные усадебные сады и парки конца 18 века. М., 2007 (刊行年に注目!) である。

<sup>27)</sup> プーシキン『完訳 エヴゲーニイ・オネーギン』小澤政雄訳(群像社、1996)、75-76ページ。

<sup>28)</sup> 近年のロシアにおいて日常性研究・日常誌が流行現象となっているが、慎重さに欠けることが多いことを指摘しておく。「風俗」にたいする柳田國男の関心の批判的継承を試みた色川大吉の以下の文章を参照。「柳田『世相篇』では、衣食住の形態や変化を平板に追うというやり方などならず、むしろ衣食住に対する民衆の感覚の変化(情動)を重視し、それを内側からとらえることによって《民衆的近代》に向う時代相を浮かび上がらせるという方法を示している」(色川大吉『昭和史 世相篇』1990、小学館)。

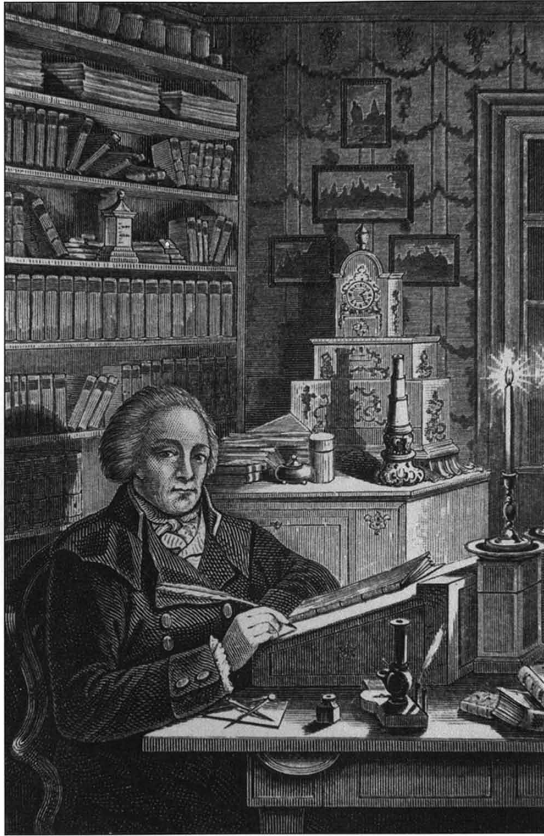


図1 「手記」執筆中のアンドレイ・ポロトフ

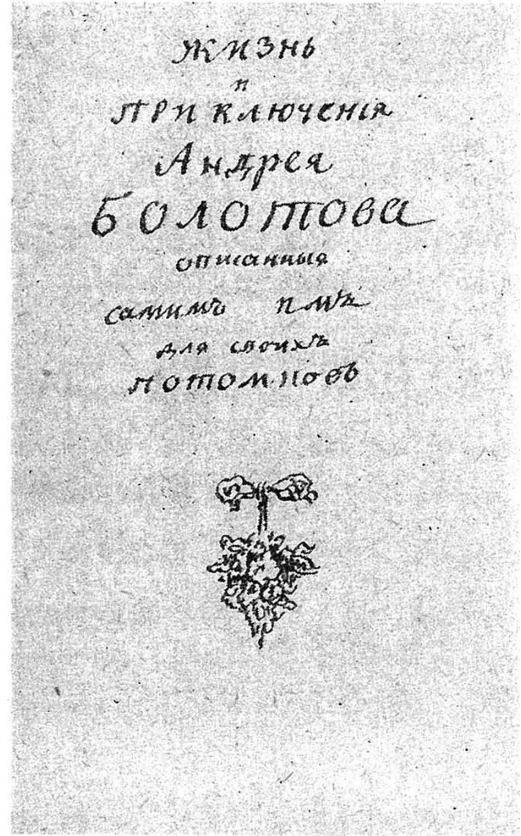


図2 「手記」表紙

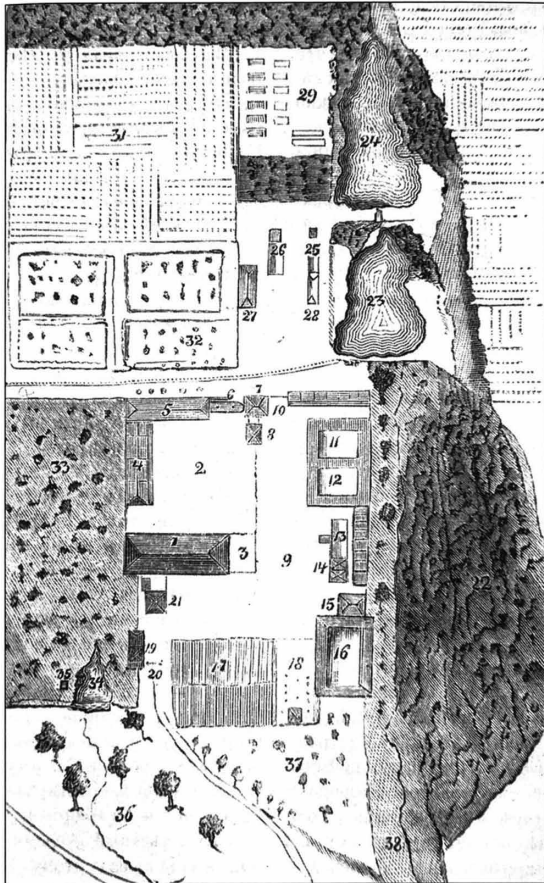


図3 ポロトフ家屋敷（ウサーヂバ）全体図



図4 旧宅間取り

1. 母屋 2. 前庭 3. 台所庭 4. 穀物小屋 5. 馬車置場
6. 入口正門 7. 管理人部屋 8. 厩 9. 後庭 10. 出口門
11. 羊小屋 12. 家畜小屋 13. 地下室付納屋 14. 氷室
15. 召使部屋 16. 馬庭（馬場） 17. 野菜園
18. 貯蔵室付養蜂場 19. 召使小屋 20. 門
21. 召使部屋と台所 22. 白樺林 23. 下池 24. 上池
- 25、26. 穀物乾燥小屋 27、28. 家畜飼料用ワラ保存小屋
29. 乾燥堆 30. 果樹園 31. 大麻畑
32. ポロトフ義母が植えた果樹園 33. 先祖以来の大庭園
34. 水路 35. 風呂小屋 36. 丘 37. 先祖が植えた下庭園
38. 蒸留酒製造所

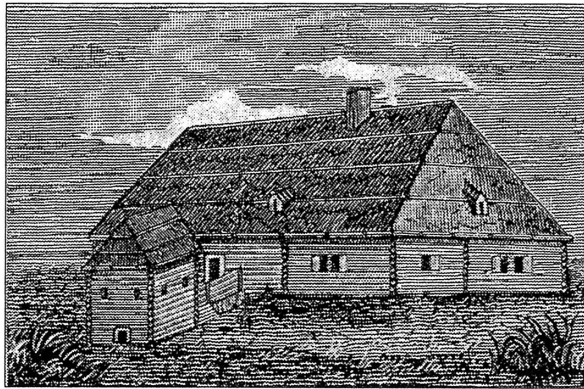
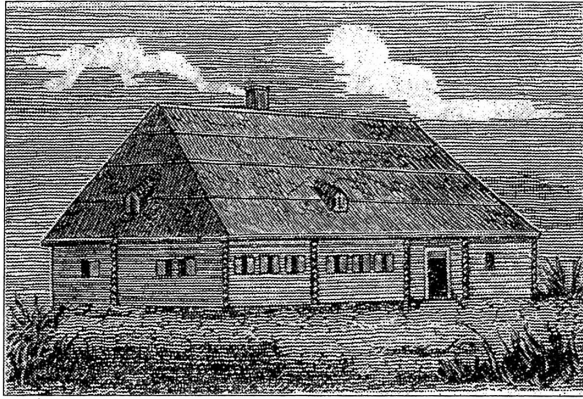


図5 旧宅スケッチ

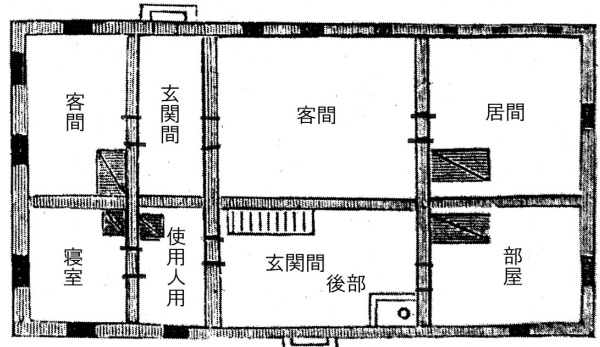


図6 1963年リフォーム後

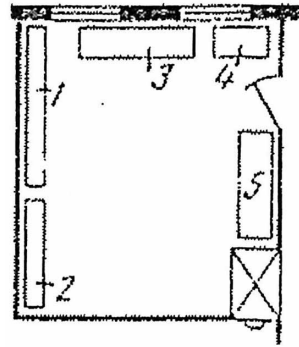


図8 アンドレイ書斎

- 1. 棚
- 2. 薬棚
- 3. 文机
- 4. 発電機
- 5. ソファ

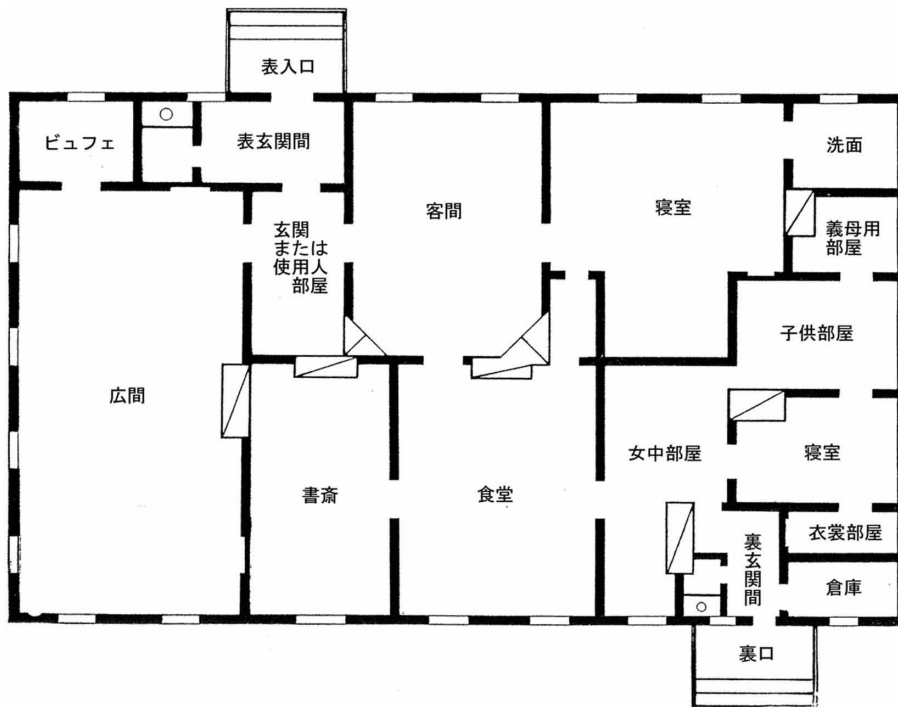


図7 1968-69年新宅

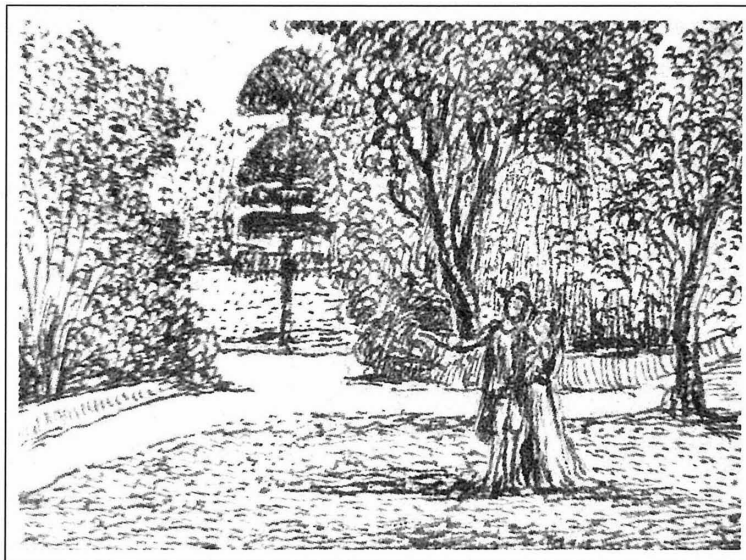


図9 庭園内散策

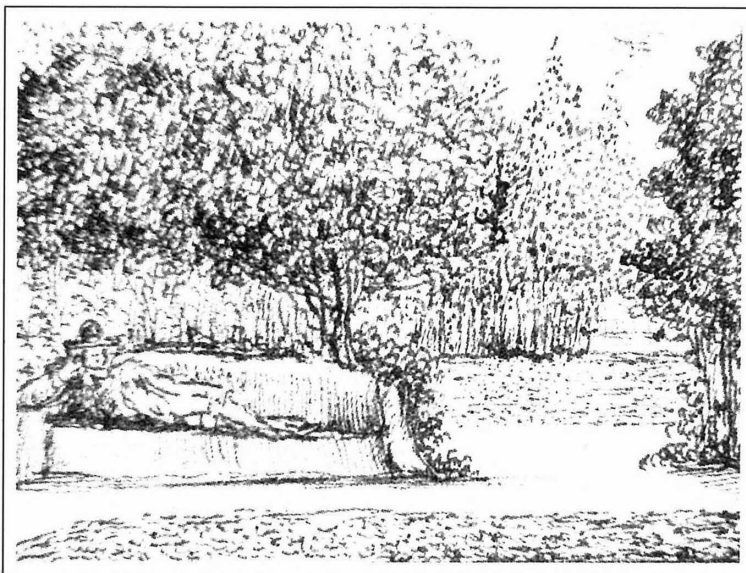


図10 ベンチで読書と昼寝

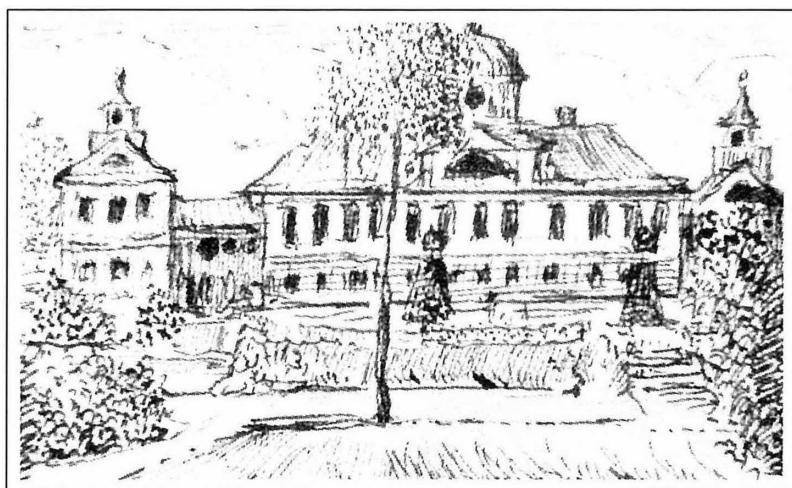


図11 母屋正面

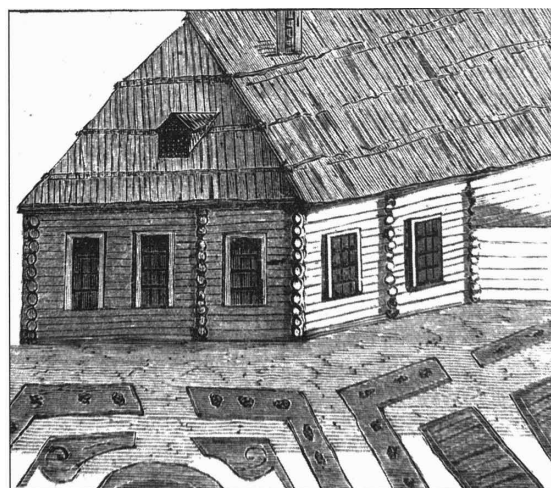


図12 窓下